九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# [075] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10190

出版情報：語文研究. 75, 1993-06-06. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

## ≪会員著書紹介≫

### 今井源衛・森下純昭・辛島正雄　他校注
### 新日本古典文学大系26
### 『堤中納言物語とりかへばや物語』

今井源衛・森下純昭・辛島正雄の三氏による『とりかへばや物語』の校注が、新日本古典文学大系の一冊として刊行された。

性転換という特異な内容を持つこの作品は、王朝文学の中で長らく末席に据えられてきた感がある。しかし近年になって、その再評価の気運が高まり、中でもそれを推し進めてきたのが、校注者の三氏であることは衆目の一致する所であろう。

今井源衛氏は、夙に『とりかへばや物語』（宮内庁書陵部蔵本影印本、新典社、昭46）で、研究上有意義な本文資料を研究者に提供する一方、『鑑賞日本古典文学』第12巻（角川書店、昭51）では、本文の一部を採録し、一般の読者にも親しみやすい、評釈という形で『とりかへばや』を紹介し、その「総説」は後に「『とりかへばや』論」として『王朝末期物語論』（桜楓社、昭61）に収められた。また森下純昭氏の『新釈とりかへばや』（共著、風間書房、昭63）は近年なされた本格的注釈書の白眉であり、辛島正雄氏が「『とりかへばや物語』における『源氏物語』摂取――四の君密通事件の場合――」（『語文研究』47）以来、『とりかへばや』と先行作品の関係を中心に斬新な論を展開してきたことも、記憶に新しい。

本書の語注は、先行作品の影響の色濃い本作品の特質を考慮し、物語類のみならず、古注釈書・私家集・古記録類に幅広く言及する一方、『とりかへばや』以後の物語との類似点などをも指摘し、脚注という限られた分量でありながら、『とりかへばや』と前後の物語との繋がりが一目瞭然である。更に、単なる逐語訳にとどまらず、起伏に富む筋立を立体的に復元する、内容に踏み込んだ説明も付され、作品本来の持ち味を十二分に汲み取ることができる脚注となっている。底本は陽明文庫本、今回初の活字化である。

巻末には、散逸した古本『とりかへばや』を推測する手がかりとしての「散逸古本『とりかへばや』参考資料」を、また「『とりかへばや物語』主要登場人物官位・呼称変遷一覧」及び「参考文献」を付す。

（平成四年三月　岩波書店　A5判　四一二頁　三五〇〇円）

### 石川八朗　他校注
### 新日本古典文学大系72
### 『江戸座点取俳諧集』

本書は、元禄から嘉永の間にかけて成立した点取俳諧書七部の注釈、解説としての三篇の論文、及び索引から成り立っており、その内石川八朗氏の担当部分は『二葉之松』、『末若葉』、『江戸筏』の三部の校注と、解説の「其角の批点について」である。

芭風俳諧を俳諧史における唯一無二の正統として、その他の流派の位置付けも芭風俳諧を基準として行うような偏った考えは流石に近年は改められてきており、個々の流派の俳諧についての研究が盛んになってきていることは実に喜ばしいことであるが、それぞれの作品についての研究に関しては未だに甚だしい格差があることは否

めない。現に本書に収められた七部の書は、部分的に注釈を加えられたものはあるにせよ、全篇に渡る本格的な注釈を施されるのはいずれも初めてである。この一事をとっても、点取俳諧の、ひいては俳諧史の研究における本書の意義が理解できよう。

又、今日の我々にとっては馴染みが薄いがこの分野を考える上では欠かせない要素、就中「座」や「側」といった集団の存在や、批点の実態といったものについても本書は、各作品の冒頭部に簡潔にまとめられた〔成立〕、〔内容〕、〔意義〕等の説明と、解説の各論とによって格好の教科書となっている。例えば、石川氏の「其角の批点について」は其角個人の俳諧点者としての側面の研究であると同時に、元禄期の俳諧の批点の様相を端的に示すものでもある。

入門書から研究の基本的文献としてまでの幅広い用途に堪え得る本書の出現によって、今後益々の研究の進展が期待されるものである。

（平成五年二月　A5判　五一六頁索引三九頁　三八〇〇円　岩波書店）

## 板坂耀子 著
## 『江戸を歩く――近世紀行文の世界――』

「自分自身は基本的には紀行文が好きになれない性質の人間ではないか」という不安を今も持ち続けていると言う著者は、「紀行文が好きではない人に」と題して、好きになれない原因を探りながら、近世紀行文の特徴とその魅力を語っている。

紀行文は、自己の内面を見つめたり、題材や構成に悩んだりすることなしに、旅で見たもの聞いたものをそのまま書いてさえいけば一応まとまった内容の文章を書くことができるという性質を持っているため、その作品世界は雑然としたものになりやすい。語り手の目に映ったものだけが記されても、肝心の語り手自身の姿は全く見ることができず、それが読む者を不快たらしめることになる。しかし同時に、そのとりとめのなさや未完成さは魅力とも成り得るという。「そこには緊密に構成された虚構の文学にはない、不思議な自由さとのどかさがある。そしてまた、ふだん文学作品にふれている時には感じない、不安定さと緊張がある」と。

そして以下の章では、今までに紹介されることのなかった多数の文献を挙げながら、従来近世紀行文の代表作とされていた『おくのほそ道』はむしろ異色作で、代表作には橘南谿の『東西遊記』が挙げられること、観光には歌枕より古戦場が注目されること、その他花見の紀行や女性の紀行などについて様々なことが語られる。

その語り口には、語り手の見えない紀行文に反するが如く、語り手である著者「私」のものの見方や感じ方が溢れており、読者には「私」の姿がはっきりと見せつけられる。語り手の見えない表現について著者は、「その人の目で見たものだけしか見せられていなかったら、私自身の目で見たものと、それを比べて見る機会がなかったら、その人のものの見方など、どうして私にわかるか」と強い口調で言う。その言葉を借りれば、多くの人がこの著書によって、「その人」（著者）の紀行文の見方と、自分自身の紀行文の見方を「比べて見る機会」を与えられ、今後多くの近世紀行文愛好者、そして研究者が生まれていくことが期待されよう。

（平成五年三月　葦書房　四六判　二六〇頁　二四〇〇円）